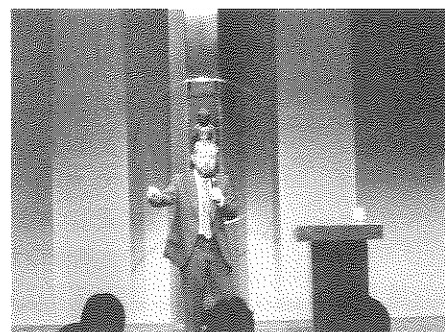


病める現代社会に、 “建設的な生き方”を!!



第35回寺子屋トーク「からだ」と「こころ」のチューニング」が、11月30日に開催されました（参加者65名）。今回の企画は、日本吃音臨床研究会の代表で、寺町倶楽部の運営委員でもある伊藤伸二さんの発案で立ち上がり、ゲスト交渉や広報など、事務局と連携をとりながら準備を進めました。

メインゲストのデイヴィッド・K・レイノルズさんは、森田療法と内観法を実践・研究し、これらをもとに新しい教育療法“Constructive Living（建設的生き方）”を提唱、指導者として活躍しています。

第1部の講演は日本語で行われ、たっぷりのユーモアと実践的な内容で参加者を魅了。第2部は伊藤さんのコーディネートのもと、参加者との質疑応答が1時間余にわたって展開されました。アンケートの回収率は高く、『感情はコントロールできないが、行動はできる』『なすべきことをする』などのメッセージを、日常に活かそうと思います」という感想も多く寄せられました。

いのちと出会う会

いのちについて語り合う場として定着した「いのちと出会う会」。1月と2月の予定をお知らせします。

第25回 1月16日(木) 「看取りとホスピス」

話題提供者

大阪生と死を考える会会長・はやしやまクリニック名誉院長 谷莊吉さん
病院で死ぬということは、多くの場合「尊厳ある死」とはほど遠い。人生最後の時間を人間らしく過ごすために、ホスピス病棟の普及がぜひ必要です。死を看取った後の「別れをいとおしむ」儀礼（葬送）のあり方も、残された者の心のケアとし

て考えてみましょう。

第26回 2月20日(木) 「剛は自転車で 転んで死んだ」

話題提供者

腎性尿崩症友の会 神野啓子さん
腎性尿崩症という稀少難病に対する、情報不足で17歳の我が子を死なせてしまった……。同じ病を持ち、悩む全国の家族と一緒に自助支援の友の会を立ち上げ、歩みを始めたセルフヘルプ活動について語っていただきます。

※いずれも18:30開会、21:00閉会

年末恒例・自分感謝祭は
12月26日に開催!!

恒例の自分感謝祭は、例年どおり12月26日に開催します。

この儀式は、今年一年をふりかえって、自分の行いを懺悔する、應典院だけのオリジナル法要。一人ひとり、懺悔のカードを仏前で浄梵（聖なる火）にくべ、新年の新たな出発を誓います。荘厳な電子オルガンの演奏の中、光につつまれながら、一年の終わりにふさわしい「鎮めの儀式」を堪能してみませんか。

なお、18時からの夜の部は、終了後に「年忘れ交流会」を開催、持ち込み歓迎ですので、こちらもふるってご参加ください。應典院主催／寺町倶楽部協力。

◆日 時:12月26日(木)

① 14時～ ② 18時～

◆参加無料(交流会は参加費1000円)

◆数珠をご持参ください。

◆申込みは事務局まで

【新入会員ご紹介】

(2002年12月10日まで)

前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。

○個人会員

【岐阜県】

中塚 一 大阪市天王寺区

サリュ VOL. 35

應典院寺町倶楽部のニュースレター

発行日 2002年12月10日
(偶数月発行)

編集人 池野亮、大塚郁子

川井田祥子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL06-6771-7641

FAX06-6770-3147

Salut

應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol. 35

サリュ

フランス語で救いの意



落語作家くまざわあかねさんは、昭和10年の生活を1ヵ月限定で体験した。何をすることも五感をフル活用したスローライフ。いちばんの変化はコミュニケーションの密度で、伝えたり聞いたりすることが多いために、口数が増えたという。めんどろだけ、あたたかい生活だ。
なんでも簡単にアクセスできて、助けを借りずともお目当てのものにたどり着ける現代。便利さの陰に隠れてしまったものは、いったいなんだろう。

2002.December

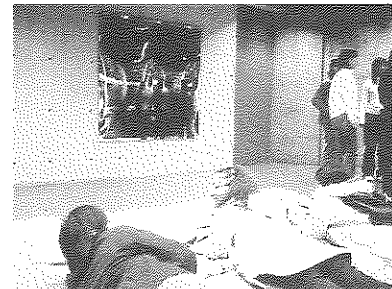
寺町倶楽部秋の一大イベント コモンズフェスタ2002 “対話”をテーマに盛大に開催!!

應典院寺町倶楽部の秋の一大イベント・コモンズフェスタ2002「対話のレッスン〜Communication Studies〜」(第11回大阪生涯学習フェスティバル協賛事業/後援:大阪府・大阪市・他)が、11月4日〜10日までの7日間開催されました。5回目を迎える今回は“対話”をテーマに新しい企画を展開、幅広い分野で活躍するNPO17団体が連日20の催しを実施し、期間中約1000人が應典院を訪れました。

オープニングは、つき山いくよさんと辻野恵子さんのパフォーマンス「まるでま。」で華々しく幕を開けました。應典院の本堂をイメージしたパフォーマンスは、参加者の視線を釘付けにしたようです。続いて、各参加団体の代表者による恒例のプレゼンテーション。その後、2階の気づきの広場で開催されたパーティには、参加団体・アーティスト・参加者などが多数参加し、さまざまに交流しながら“対話”の輪を広げていました。

今年のアート・コラボレーション・プロジェクトは、アーティスト・井上廣子さんと田尻麻里子さんの作品を展示した展覧

会、『By Your Side』。企画したのはキュレーターの中西美穂さんで、「女性作家による、自分に見立てた姿を投影した作品を1階と2階に分けて展示しました。両方を見比べて、違うことや同じことをぜひ身近な人と話してみたい」と、対話を意識した展覧会を企画してくれました。1階は井上さんの作品で、スロー壁面に吊った白のキャンパスの作品と、女性の写真の上にビデオプロジェクターで写真(精神病院や強制収容所等の窓の内と外の写真)を重ねて映し出した作品。2つを合わせて展示。田尻さんは、プラスチックミラーに自分の顔を拡大・印刷した作品を2階の気づきの広場壁面に展示しました。1階の暗い空間と2階の明るい空間を合わせ持つ應典院の構造を強く意識した上で、モノクロームの平面をベースに、印刷や写真という手段を用いた作品を設置したことが、今回の展覧会のひとつのポイントです。



2階の気づきの広場に大きなクッションを敷き、腰掛けたり寝転んだりしながら、くつろいで作品に向き合い、語り合える場をつくる工夫も試みました。また、初日に実施したギャラリートークでは、一方的に解説するのではなく“対話”を試みてもらうため、参加者がどう感じているかを聞き取りながら進めました。展覧会を訪れた人々はリラックスできる空間の中で自由に鑑賞して語り合い、一人ひとりの胸にはさまざまな思いが起こっていたようでした。

今回のもうひとつの目玉企画は、“対話”を実践する試みとして企画した「トーク・カフェ」。期間中3回、日替わりマスターを中心に、毎回ひとつのテーマについて語り合いました。1回目のマスターは、應典院を拠点に活躍する劇団「南船北馬一団」。テーマは「とても近くなお芝居たち」。芝居の作られる過程や演出のつけ方などの話と、役者がドラマリーディングを行うという内容。2回目のマス

ターは「関西環境情報ステーションPico」のメンバー。「トーク・ザ・ツリー〜ターカイン・ストーリーを題材にして〜」と題し、環境保護について考えるために作られた同名のビデオを鑑賞。その後、感想とともに身近な環境問題について話し合いました。3回目のマスターは大阪ミナミにある「坊主バー」のスタッフ。テーマは「実際のところ、何が『罪悪感』を私に持たせるのだろう」。罪悪感という普段は避けてしまいたくなるテーマでしたが、参加者はもっとも多く、お酒の力もあったのか、盛会でした。

参加者の感想は「とことん真剣な話ができたと感じがします」「10代のしゃべり場ならぬ、大人のしゃべり場を体験したようでした」とおおむね好評で、知らない人と顔を合わせて語り広げる“対話”を、大いに楽しんでいるようでした。

昨年よりじまった大学の公開ゼミは、今年も健在。引き続き参加した京都橘女子大学・文化政策学部的小暮宣雄助教授ゼミは、学生がアーツに遭遇した際の気持ちをためた日記を期間中公開。最終日には、学生による「歌詞を読む」ワークショップも開催されました。また、大阪外国語大学・国際文化学科の森栗茂一教授ゼミは、東京・向島の芸術系まちづくりの調査結果の報告を聴くというものでした。



多彩なプログラムを実行するにあたって、運営を支えてくれたのは「サポーター」たちです。日本写真映像専門学校や学生、公募欄を見た人、昨年のサポーター……と、立場も多様な関わり方もさまざまですが、とても心強い存在でした。また、参加団体や参加者に積極的に働

きかけ、自分の関心の幅をどんどん広げているようでした。

今年も多くの新しい出会いと刺激が生まれたコモンズフェスタ。参加団体、参加者、サポーターと、あらゆる分野に活動の場がある人たちの“対話”を可能にしたようです。来年はどのような展開になるか、どうぞご期待ください。

※2月頃、コモンズの開催報告書を発行する予定です。



寄稿 ヒソカに楽しみにしています

NPO法人もうひとつの旅クラブ代表 李有師

九州国東半島の六郷満山(ありとあらゆる山谷に寺がイッパイという意味らしい)には10代の頃よく旅に出た。3年たて続けに新年を迎えたりもした。

何をしに? と問われれば「お寺めぐり」と答えるしかない旅だった。昭和40年代後半、観光客に出会うことのない国東に、そんな若者が多くいた。

あっちこっちの寺に行き、住職に「説教」してもらうことが新鮮な発見だった。なかには国宝を守る寺などもあったが、そんなモノにも触れさせてくれたり、甘酒やミカンのご相伴にあずかることも再々。

同行グループの女性に酒の酌をしてもらうのが何よりの生き甲斐という、現代的に表現すればセクハラ系名物住職もいたりした。

そんなわけで京都の観光寺院しか知らない若者が、けっこう全国から集まった。異空間かつ住職という教師付き自分再発見の場、とてもいえばよいのだろう。

それから30年もの時間が経過して應典院のバッションに出会う。ボクはこの二オイに10代の頃の自分を思った。「アッ、『あの心地』とおなじや!」

17歳の悩み多きあの頃と、迷走するいまこの頃の中年時代。悩みのタネは違っても、自問自答の不安に『あの心地』は救い以外の何ものでもない。住職の秋田さんには、まだ説教らしき時間を共有していただいたことはないが、じつはソロソロしてほしいと考えている。また、自分が死んだときのお経も読んでもらえたら、と考えてもいる。

ご自分の東京時代のお話を新聞などで赤裸々に語られる最近の住職を拝見するたびに、ますます説教していただける「その時」をヒソカに楽しみにしている。

お便りによれば、上町のまちづくりにも協働参画されるとのこと。もっとも大阪らしい地、ともいえる應典院あたりの、そこ・ここの寺の門が開いて、大阪ならではの街と人の二オイが発露され、たこ焼き、ヨシモト、タイガースに負けない「故郷の表情と歴史的な価値」を、明確に表現してもらえればと思う。

そして何より、それらすべての総体がコモンズフェスタとするならば、そのムーブメントが外向してこそさらに飛躍するよう思えます。今後も寺院内の熟成に努められるとともに、外に飛び出す勇気と概念リーダーとして、コモンズが「街と共に行動する情熱」であり続けてほしい、と生意気にも考えています。

積み重ねよう！“対話のレッスン”

真のコモンズ空間創造のために

5回目を迎えたコモンズフェスタ。今年をひとつの節目だと捉え、原点を見つめ直すために選んだキーワードは“対話”。つまり「自分と異なった価値観に出会い、違いを違いのまま認めながら、折り合いをつけたり、新しい価値を見つけたりすること＝対話」であり「対話のできる関係性や場をつくることこそが、コモンズ空間の創造である」と考えたのです。

今年のコモンズをふり返りながら、これからの方向性を探ってみました。

はじめは、予期せぬ出会いから

——まず、簡単な自己紹介をお願いします。

大門●当番弁護士制度を支援する会・大阪に設立当初の96年から関わり、活動しています。当番弁護士制度(*1)は簡単に言うと、弁護士の無償の人権擁護活動で、それを応援するNPOが私たちの団体です。

司法や裁判と聞くと、「堅くてむずかしい」とか「自分には関係ない」といったイメージで捉えられがちですが、法律の専門家である弁護士と一般市民とを結び、いちばん身近なシステムが当番弁護士制度で、これを通じて誰もが法律や裁判を自分のこととして関わっていければいい、と考えています。

松田●大阪セルフヘルプ支援センターの活動に92年から関わっています。私たちは、一言でいうとセルフヘルプグループ(*2、以降“SHG”と略)をサポートする団体で、活動の一つが電話での情報提

供です。

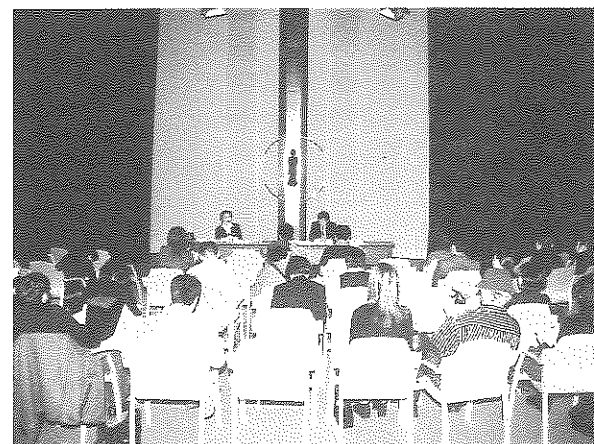
SHGは大阪だけで数百のグループが活動しているので、「グループに参加したい」と思った人それぞれに合った情報を選び出すことは簡単ではありません。一人ひとりの希望に添えるよう、また、最新の情報を提供できるように努めながら、毎月第1・3土曜の午後に電話相談をしています。他にはセミナーを開き、グループ間の情報発信や交流の場をつくったりもしています。

十河●医療看護の専門雑誌や書籍を出版している会社で働いています。担当は『ネオネイタルケア』という、新生児医療専門の雑誌の編集で、座談会をセッティングしたりすることもあるんですが、まさか自分が話す側に回るなんて、と思っていたところです(笑)。

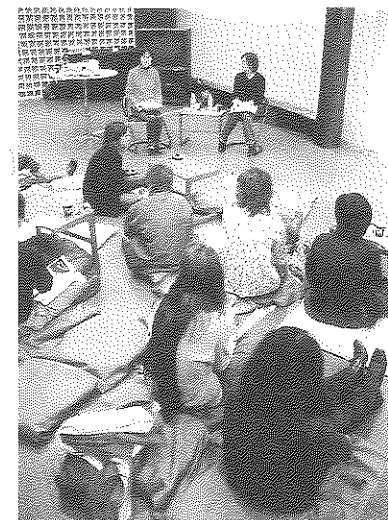
雑誌はいわゆる業界誌の部類に入り、基本的には読み手も書き手も医療者という狭い世界なのですが、近頃は「医療をよくするには患者さんや家族の声を聞かなくては」という意識が高まってきて、家族や、家族を支える臨床心理士の方

に原稿を書いてもらうことが増えました。未熟児や障害児を育てている親の会や、お子さんを亡くされた家族の方を取材させていただくこともありますし、人文・社会科学など、医療をより大きな文脈で捉えられるような工夫をするよう、心がけています。

——コモンズに関わるようになったきっかけは何ですか？



▲当番弁護士を支援する会主催「外国人裁判の「壁」、通訳問題を考える」



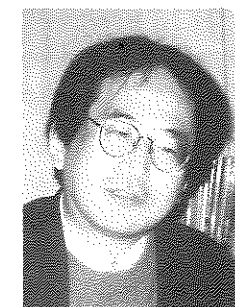
十河●以前から應典院のことは知っていて、きっかけがあれば関わりたいと思っていました。というのも、仕事でいろんな人と出会うたびに、「編集の技術に習熟するだけでなく、自分の視野を広げたり人間力を高めたりすることも必要だ」と考えるようになって、「そのために應典院に関わったらどうだろう」と思ったからです。

それで去年、自分の仕事にも関わりのあるテーマで行われた寺子屋トーク(*3)に参加したら、たまたまコモンズのアーツ・ボランティア募集のチラシを手にしたんです。「これなら、少しでも主催者に近い立場で関われるのではないかと」思って応募しました。

大門●秋田さんとは應典院が再建される前からの知り合いで、「新しいお寺を作りたい」という夢をよく聞いていました。再建されてからチョコチョコのぞきにきたり、催しを手伝ったりする程度だったのが、2回目のコモンズ……だから99年かな？ 秋田さんから「今年のコモンズで



大門秀幸さん



松田博幸さん



十河宏栄さん

何かやらへん？」と誘われたんです。

知り合ったときに私はNPO活動とか演劇をやっていたので、たぶん「おもしろい奴」だと思われてたんでしょうね。言われてはじめて、「そうか、自分も應典院で何かやる側になってもええんか」と発想の転換ができました(笑)。

松田●應典院に初めて来たのは1回目のコモンズで、SHG関連の催しがあったときです。「ユニークな寺があるもんやな」というぐらいの認識だったのが、今年はたまたま、支援センターのメンバーの伊藤伸二さん(※寺町倶楽部運営委員)が「今年は應典院でやろう」と提案してくれたんですね。広報もしてくれると聞き、「それはいい！」と(笑)。

対話に必要なものは？

——十河さんには開催報告書の原稿を書くため、いろいろな催しに参加してもらいましたが、とくに印象に残ったものは何ですか。

十河●どれも印象的だったし、いろんなことを考えさせられたので、ひとつを選ぶのはむずかしいのですが、コモンズに来た人はほとんど見ているだろうという意味で、アート作品のことを話したいと思います。2階に展示してあった驚いた顔の作品は、今回のテーマである「対話のレッスン」を見事に象徴していると感じました。「対話」は、他なるものと出会う、そこから何か新しいものが生み出されることだと思うんですが、対話のはじまりにあるのは“驚き”だと思うんです。自分とは

◇ご出席のみなさん◇

★大門秀幸(だいもん・ひでゆき)さん
「司法NPO～当番弁護士制度を支援する会・大阪」事務局長
(1) 地方公務員 (2) 100円ショップの品ぞろえの充実さ (3) 應典院近くの「三好」の餃子は絶品！

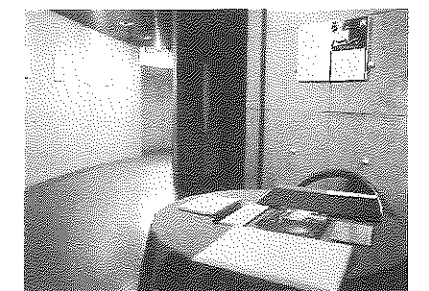
★松田博幸(まつだ・ひろゆき)さん
大阪セルフヘルプ支援センター代表
(1) 大阪府立大学教員(社会福祉学部) (2) 「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」 (3) 麺類ならなんでも

★十河宏栄(そごう・ひろえ)さん
コモンズ・サポーター
(1) (株)メディカ出版勤務 (2) 「えんとこ」 (3) 牛乳

※(1) 職業 (2) 最近、感動した映画またはできごと (3) 好きな食べ物

違う価値観の人と出会い、「こういう考え方もあるのか」と驚くことで、視点がずらされ気づきはじまる……本当の対話が成立しているところには、そういうダイナミックなできごとが起こっていると思います。

他者との対話以前に、「自分はどうな





のか?」と、自分自身に問いかけることの大切さを表現しているように感じました。「私」がまずないと、他者とも出会えませんかもね。

——アート作品について、松田さんはどうでした?

松田●1階の作品は、前を通ると自分の身体に光が当たって、何度も繰り返すうちに、日常生活ではほとんど意識していない「光」の存在を感じました。光があるからこそ形が成り立っている、という感覚かな。

大門●アートには縁遠い人間なので(笑)お二人のような感想は言えませんが、作品の飾られている環境の中にいる、それだけでもいいなと感じました。司法は、どちらかというと無味乾燥に見える分野なんですけど、弁護士会館で催しをやるのとは違って、アート作品の展示されている空間で開催するのは、参加者にもなんらかの影響を与えているでしょう。作品があったからうちの催しがよかった、という直接的なものではありませんが、——コモンズに続けて参加している、その理由は?

大門●司法関係の催しのほとんどは、弁護士会館を会場に、法律関係者や裁判で困った経験のある当事者、法学部の学生が参加するというパターンです。

とくにうちの団体は、法律全般ではなく刑事手続き、しかも当番弁護士制度という限定したテーマを扱っているの、閉じた世界にこもりがちです。そうならないようにコモンズでは、「自分には縁遠い」と思っている人たちにも足を運んでもらいやすいようなテーマ設定を心がけていて、たとえば初めて開催したときは「裁判

官って身近ですか?」というテーマで、現役の裁判官をゲストに迎えました。じつは裁判官が一般市民の前で話すのは日本初、というくらい画期的なもので(笑)、本堂が満員になるくらい多くの参加者が来てくれました。違う価値観や立場の人と出会う、それが対話の前提なら、開かれた場であることはとても大切です。

新しい一歩を踏み出すために

——今回の新しい試み、トークカフェ(*4)はいかがでした?

十河●よかったですね。1日目は劇団の方の話を直接聞くことができ、演劇に対する見方や感じ方が変わりました。

いままでは映画やテレビの方がリアリティを感じられて、「演劇はしょせん作り物」というイメージが強かったんです。でも、その場に参加していること、生身の役者が演じている空間に身を置いていることをもっと楽しめばいい、ということに気づきました。

3日目の坊主バーは、いろんな立場や年齢の人と対話ができてももしろかったです。3時間半という時間の長さを感じなかったし、終わってからも、他の人から投げかけられた言葉をふと思い出して、日常の中でまた考えはじめたりしてるんです。対話が終わったところから、一人ひとりの中で何かが始まる——そういうことが確かに起こっていたような気がします。ああいう場が、コモンズだけではなく定期的に開催されればおもしろいと思います。

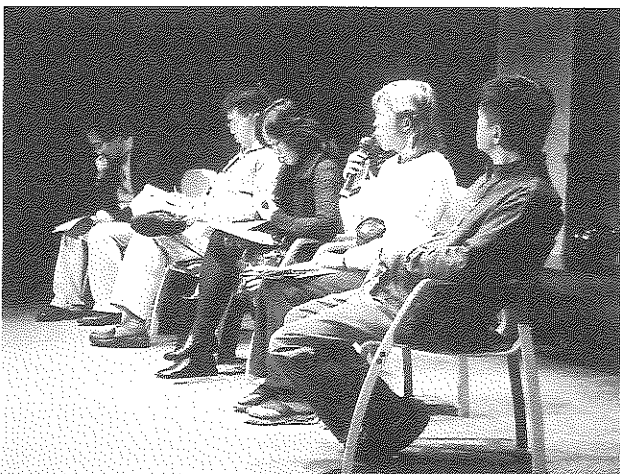
——トークカフェは、団体同士が交流できるように、との期待も込めて企画したんですが、実際にはそうなりませんでした。事務局の働きかけが足りなかったのかも知れませんが、参加団体としては期間中の他の催しに参加することは負担が大きかったのでしょうか。いろいろ提出物もあったし……。

松田●うーん、最初は正直、「面倒やな」と感じたけど、そんなに大きな負担ではなかったですよ。実行委員会にはいろいろな団体の方がいて、「多様な場でいいな」と感じました。来ているうちに面倒くさがさが緩和された、という感じでしょうか。

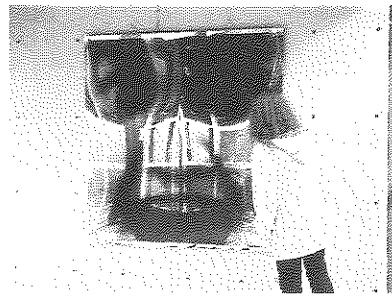
——事務局としては、参加団体とのパートナーシップをどう築いていくのか、まさに「対話が必要だ」と考えているところなんです。

大門●5回やってきて、もう一歩前進できるか、「毎年やってるから来年も」というマンネリに陥るのか、曲がり角の時期にきていることは確かでしょう。いろいろなNPO支援センターや行政がやっているボランティアフェスティバルなどは、企画側とそれに乗る側、提供者と利用者とはっきり分かれていることが多いんですが、そうじゃなくて多くの人たちと本当の協働でコモンズをやる理由は何なのか、を明確にする必要があるでしょう。「文化祭みたいでなんか楽しそう」だけで終わらずに、実際に生み出されたものは何か、いままでの検証も必要です。

逆に、参加団体は「そこまでは求めてない。場所を貸してくれるだけでいい」と思っているのかも知れない。実際に協働するのはしんどいことも多いけど、それ



▲セルフヘルプ支援センター主催「生きる意味の「再構」の場を考える」



を乗り越えてまで一緒にやろうという意思がお互いにあるのかどうか。「何かを一緒にやりたい」という意思を掘り起こしたり、密かに思っている人を探し出したり、NPOやってる人はたいがい貧乏ヒマなしやねんけど、「それでもまあ一緒にやってみよか」と思わせる雰囲気や場づくりができるかどうかです。いま流行の「コラボレーション」という言葉はカッコイイけれど、それぞれが影響しあって新しいものを創り出すことは、現実には非常にむずかしく、他できちんと実践できている例はほ

とんど聞きません。でも、それができる可能性を持っているのが、應典院であり寺町倶楽部だと思し、コモンズを続ける意味もそこにあると思います。

松田●「参加したら何かメリットがあるか」というように、すぐに損得勘定してしまうことや人が多いけど、損得を越える何かが必要なのかなと思います。その「何か」があれば、多少損でも参加しようという気になれる。うまく言えませんが、そんな思い

- (※1) 当番弁護士制度……逮捕・勾留された被疑者に、弁護士が面会して無償で法的な援助を行う、弁護士会の自主的な権擁護活動。日本では起訴され裁判になってからは国選弁護士制度はあるが、逮捕段階では公的に弁護士をつける制度はなく、不当な取り調べや冤罪の要因とも言われている。
- (※2) セルフヘルプグループ……相互援助グループ、自助グループとも訳され、同じ悩みをもつ人たちが寄り集まって体験や知恵や情報を交換し合うグループのこと。当事者同士が集うことによって、「孤独感の緩和」や「実際の支援を得ることができる」などのメリットがある。海外での歴史は古く、日本でも現在、アルコールや薬物依存症の人々、心身に障害をもつ人々、子どもや伴侶を亡くした人々など、さまざまなグループが設立されている。
- (※3) 寺子屋トーク……2001年10月8日に開催した第29回寺子屋トーク。タイトルは「がんばらない」。ゲストは鎌田實さん(諏訪中央病院管理者)、辻本好子さん(ささえあい医療人権センターCOMIL代表)、伊藤伸二さん(日本吃音臨床研究会代表)。
- (※4) トークカフェ……「対話のレッスン」を実体験する場として、3日間のみ開催。

コモンズフェスタ2002を終えて 應典院寺町倶楽部インターンシップ生 杉岡 秀紀 (同志社大学経済学部4年生)

「“お寺はNPOの原点である」という、かの有名なドラッグの言葉の意味するところが、ようやく自分の目で、耳で、肌で感じられた、そんな1週間——これがインターンシップ(以下、インターン)という立場から今年のコモンズフェスタを振り返ったときのもっとも端的な感想です。

スケジュールの関係で全プログラムこそ参加できなかったものの、参加させていただいたものにはすべて、それぞれにオリジナリティ、メッセージ性があり、應典院の掲げる“学び”“癒し”“楽しみ”を十二分に堪能させてもらえた気がします。

少しだけいつまんで紹介させていただくと、まずは、自分と同世代の大学生——具体的には、手作りのアーツ日

記を公開し、身近な芸術観を見直す機会を与えてくれた「京都橘女子大小暮ゼミ」、環境や貧困・経済という諸問題を「ファッション」という言語・切り口から、「目に見えやすく・わかりやすく・楽しく」表現してくれた「学生フェアトレードNPO シナジーグリーン」、このイベント自体の合言葉であるコミュニケーションを“おもちゃ”という、誰もが童心に返ることのできるツールから深める試みをした学生団体「トゥルモンド」、の存在には大きな刺激を受けました。そして少し個人的ではありますが、「えんとこ大阪上映実行委員会」の映画「びぐれっど」、「関西子ども文化協会」の「からだでディスカッションするワークショップ」、「哲学コミュニケーションkikumimi」の「哲学カフェ」、「詩の学校」の「OSA

KA感情線」、自分自身がサポートスタッフとして関わらせていただいた「上町台地のまちづくりを考える会」のパネルディスカッションなども私にとり非常に印象深いイベントとなりました。

加えて、今年のキーワードである「対話のレッスン」から発案された「トークカフェ」——これもアットホームな雰囲気の中、さまざまな立場・年代の方との交流が和やかに深められた、という意味でたいへん有意義な試みでした。

最後になりましたが、私のインターンという色眼鏡からこの7日間に及ぶ「コモンズ」、つまり、この「共有の場」から学んだこと——それを述べさせていたく、それは、一言で言えば『一緒にバラバラの魅力・潜在性』——これになるかと思っています。このコモンズに関わっておられる方々には、あえて説明の必要はないかと思いますが、これこそがまさに、お寺というNPOのなせる業(わざ)かな、と思う次第です。

舞台芸術祭SPACE×DRAMA2003 制作会議スタート!

来年夏の開催に向けて、準備を進めている舞台芸術祭。2次選考で選ばれた7劇団、それぞれの制作担当者が集い、應典院で毎月一回、「制作会議」を開いています。寺町倶楽部運営委員の西島宏さんと事務局スタッフ、アートマネジメントに関心のある魚住亜弥さん(神戸女

学院大学)なども参加、「劇団と劇場の関係を深化」させるための意見交換を行いながら、よりよいパートナーシップを築いていけるような可能性を模索中です。

今後、サリュ紙面で経過を報告していきますので、ご支援ご協力をお願いいたします。



Make Up Community

10月にオープンした小劇場「アート・シアターdB」をご存じですか? 大阪市浪速区にある遊園地「フェスティバル・ゲート」の中にあり、コンテンポラリーダンス(*1)の上演を主にしています。大阪市の「新世界アーツパーク事業」の一環として設立され、「公設民営」という全国的にも珍しい事業形態を採っています。

運営を受託しているNPO法人「DANCE BOX」の代表、大谷燦(おおたに・いく)さんにお話を伺いました。



——コミュニティな人々 大谷 燦さん

こっそりと準備を整え、79年西部講堂での公演の最終日に、本当に逃げ出すように日本を離れました。ヨーロッパやアフリカを約1年放浪、帰国してからはクラフトなどで生活は続けたんですが、知人の勧めもあって91年、ダンスの世界に戻ることになりました。「逃げた」という負い目があったからですが、もう表現者に戻るつもりはなかった。それほど土方の存在は私にとって大きかった、大き過ぎたんですね。

コンテンポラリーダンスは、身体を通じて他者を感じ、違いを認め合いながらともに生きるような、豊かな社会を創っていく可能性をもっている。そう思うからこそ、ダンサーは一つの頂点をめざすだけではなく多様であってほしいし、それぞれの個性や魅力を高め合っていける環境が必要です。よりよい表現を生み出す「場づくり」のために、お客さんや地域の人も巻き込んでいこうと考えているので、應典院さん、今後ともよろしくお願いします。

目を浴びていて、高校3年の秋に舞台をはじめて見た瞬間、「これだ!」と恋愛してしまいました。三日三晩、自分が舞踏を踊っている夢を見るぐらいだったんです(笑)。

大学入学と同時に上京し、土方の流れを組む舞踏塾「グランカメリオ」に入塾、山形県で集団生活をしながら73年に「北方舞踏派」を結成。旗揚げ公演の「塩首」には北海道や沖縄からもお客さんが来て、のべ500人もの動員があったんですよ。全国公演も重ね、「時代をつかまえてる」という実感はあったものの、「どんなにがんばっても土方を越えられない」と、挫折感にさいなまれていました。

「もう無理だ」と諦めることを決意し、

(*1) コンテンポラリーダンス……現代社会のありようを身体で表現する前衛的なダンス。

(*2) 土方義(ひじかた・たつみ)……70年代に世界的ブームを巻き起こした舞踏の創始者。「舞踏とは命がけで突っ立っている死体である」などの名言を残すとともに、文学・美術・哲学など、他の分野の人々にも多大な影響を与えた。

大阪のミナミで生まれ、幼い頃から松竹新喜劇や歌舞伎を見て育ちました。高校生の頃は他の学校の連中と一緒に劇団を作り、授業中に乗り込んで行って芝居する、ゲリラ演劇をやっていました。公演のビラ貼しもゲリラ的にやって、あるときは一晩かかって赤いビラを貼りまくって、戒橋全部を真っ赤にしたこともあります(笑)。

当時は学生運動が盛んだけど、理屈が先行しているようじゃダメだった。「これを伝えたい!」というものが明確にあったわけではなく、生き方として演劇を選んだ快感とか、政治で解決できないことを演劇で表現することがおもしろかったんですね。マルキッド・サドのような暗黒文学が好きだったし、世間からはみ出した所で社会を見ている、という感覚でした。

その頃、土方義(*2)の暗黒舞踏が注

別掲の通り、10月20日に私の大蓮寺晋山式が挙行、第29世住職を拝命しました。改めてその責任の重さを、ずっしりと肩に感じています。

伝統とか格式とか、どこか権威的な響きがありますが、逆にそういう回路を通じてこそ達成できる「道」というものがあります。仏道、医道、芸道等々、師から弟子へと継承される奥義の文化ともいえるでしょうか。むしろ、現代ではそれが自閉したり、他を排除することがあってはならない。しかし同時に、流行を超えた不易の価値を作り出すのも、それらの「道」の役割ではないかと考えます。

オウム事件の折にすっかり誤解を受けてしまいましたが、「通過儀礼」という言葉があります。子どもから大人へ、青年から壮年へと人間的な成熟モデルを一種の儀礼体験に求めた考え方です。「求道」というにはあまりにお粗末ですが、この晋山式が私にとって生涯の通過儀礼になるのかもしれない、という実感だけはひとしおです。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

■芸術とヘルスケア日米フォーラム

去る11月5日、大阪国際交流センターで、「芸術とヘルスケア日米フォーラム」が開催、両国における芸術と癒し、ケアの問題について活発な意見交換がありました。財団法人たんぼの家主催。

1部では、このたび来日した、米国のアート・イン・ヘルスケア学会のサンドラ・パートマン博士(マサチューセッツ大学教授)らによる事例報告、2部として、私がまとめを担当、「痛みを分かち合う文化の創造」と題し、仏教の癒しについて提言を述べました。「医療福祉と芸術」という活動は日本ではまだまだですが、アメリカの先駆的な実践に大いに励まされまし

た。なお、同日の午後、パートマン博士ら一行は應典院をコンズフェスタ見学に訪れました。

■大蓮寺永代供養総墓「共命」建立

去る10月6日、生前個人墓「自然」に次いで、大蓮寺永代供養総墓「共命(ぐみょう)」が完成、開眼式法要が盛大に営まれました。

家族の多様化とともに、大蓮寺の檀信徒の間にも「家墓の継承困難」の問題が起こっており、それに対応する総墓として構想が持ちあがり、「自然」同様、荒川朱美・京都造形芸大助教授の設計・デザインにより完成の運びとなりました。

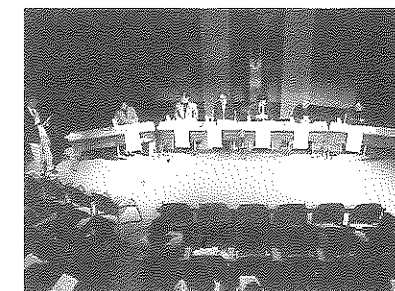
大蓮寺の広大な墓域のちょうど中央

秋田住職発

應典院 掲示板

に、屏風型の美しい威容がよく映えています。これで大蓮寺の新しい墓苑が整い、今後の寺門運営に活かされることとなります。

■上町台地のまちづくりを考える



上町台地全体のまちづくりを進めようと、このたび準備会「考える会」が発会、私が代表を務めています。去る11月8日、コンズフェスタ参加企画として「都心で暮らす、都心でつながる」を開催、約100名の参加者で賑わいました。

経済効果や巨大開発とは別に、コミュニティを核としながら、人間らしい都心暮らしの魅力を創り出そうという試み。先駆的な取り組みを続ける、からぼり倶楽部の六波羅雅一さんや扇町ミュージアムスクエアの山納洋さんら5人のゲストによるセッションが盛り上がりしました。「考える会」は来年4月に正式に発会の予定です。

■自分感謝祭で今年にさようなら

恒例の自分感謝祭が、今年も12月26日(木)に開催されます。この1年をふりかえり、自分自身に悔悟と感謝を送る、應典院のオリジナル法要です。午後2時と午後6時の2回。夜終了後、年忘れ交流会もあります。

大蓮寺第29世住職に晋山

去る10月20日、秋田光彦さんの大蓮寺晋山式が盛大に挙行、のべ400人の方々のご随喜を賜りました。晋山式とは新しく住職がお寺(山)に進む(晋)という意味。大蓮寺29代目の新しい住職が誕生となりました。

当日は早朝から大阪市内の浄土宗寺院20ヶ寺の随回向の後、午前10時から古式に則った晋山式が厳粛に営まれました。また、午後は会場を應典院に移して、にぎやかに祝賀会が催されました。

会場には浄土宗の水谷幸正宗務総長や牧達雄総本山知恩院執事長ら宗門関係、ささえあい医療人権センターCOMLの代表辻本好子さんら、エンディングサポート関係の方々など多くのご来賓にご臨席いただいたほか、大蓮寺檀信徒、バドマ幼稚園職員、PTA、應典院寺町倶楽部運営委員のみなさんにもご列席をいただきました。

今後、先代の光茂師が應典院住職に交代しますが、引き続き私が應典院主幹として実際の活動に当たってまいります。今後とも変わらぬご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

